

アンデス・アマゾン学会
研究発表要旨集

Proceedings of the Annual Conference of SAAS

Volume 13

2024

アンデス・アマゾン学会
Society for Andean and Amazonian Studies
Japan
[<https://sanams.web.fc2.com>]



アンデス・アマゾン学会研究発表要旨集

第 13 号

2024

【目次】

アンデス・アマゾン学会第 13 回研究大会プログラム		1
ペルー北部海岸地方の信仰と習俗にまつわる予備的考察：パイ タにおける聖ペドロと聖パブロの祝祭をめぐって	河邊真次	3
アンデスにおける大地信仰の複層性	岡本年正	5
インカの起源神話再考察	佐々木直美	7
他界を見ながら暮らす：アレキーパ県カスティーリャ郡ビラコ 村の調査報告	上原なつき	9
アレハンドロ・オルティスの神話学	加藤隆浩	11
El <i>usted</i> en peticiones: estrategia de atenuación en el español hablado en Medellín (Colombia)	Ji Son Jang	13
Educación multilingüe en Latinoamérica: el caso de la educación superior en Colombia	Ana Isabel García Tesoro	15
ペルー史から消えたヒターノ：“negro”・“mulato”等の観念を めぐって	大平秀一	17
ボリビア・リベラルタにおける日本人移住者：史料の整理	大島正裕	19
ボリビア・ラレカハの農地改革（3）	木村秀雄	21
18 世紀半ばペルー・リマ地域の大震災と先住民による同時多発 的抵抗の発生：レパルティミエントを基礎として	真鍋周三	23
奥付		25

Proceedings of the Annual Conference of SAAS

Volume 13

2024

【CONTENTS】

The 13th Annual Conference of SAAS Program		1
Un estudio preliminar sobre creencias y costumbres en el litoral del norte peruano: en torno a la fiesta de San Pedro y San Pablo en Paita	Shinji KAWABE	3
Plurality of the Land Worship in the Southern Andes	Toshimasa OKAMOTO	5
Reconsideraciones de los mitos de los orígenes de los Incas	Naomi SASAKI	7
Vivir mirando el Otro mundo: Informe de Viraco, Distrito de Castilla, Provincia de Arequipa	Natsuki UEHARA	9
Andean Mythology by Alejandro Ortiz	Takahiro KATO	11
The <i>usted</i> in requests: a strategy of mitigation in the Spanish spoken in Medellín (Colombia)	Ji Son JANG	13
Multilingual Education in Latin America: Higher Education in Colombia	Ana Isabel GARCÍA TESORO	15
Gitanos desaparecidos en la historia del Perú: problemas de palabras de “negro” y “mulato”	Shuichi ODAIRA	17
Japanese immigrants in Riberalta, Bolivia: Analysis of historical documents	Masahiro OSHIMA	19
Reforma agraria en Larecaja, Bolivia (3)	Hideo KIMURA	21
Gran terremoto de Lima-Perú y la aparición de la resistencia simultánea indígena a mediados del siglo XVIII: En el quid del problema de repartimientos mercancías	Shuzo MANABE	23
Imprint		25

アンデス・アマゾン学会第 13 回研究大会プログラム The 13th Annual Conference of SAAS Program

期日：2024 年 7 月 6 日（土）、7 日（日）

会場：サンポートホール高松 53 会議室（面接と Zoom によるハイフレックス）

1 日目（7 月 6 日[土]）

司会：長尾直洋（名桜大学）

13:05-13:10 開会挨拶

第 13 回研究大会実行委員長 真鍋周三

13:10-13:50

ペルー北部海岸地域の信仰と習俗にまつわる予備的考察：パイタにおける San Pedro と San Pablo の祝祭をめぐって

河邊真次（三重大学）

13:50-14:30

~~レコード市場に持ち込まれるティンク~~ ※発表辞退

山本尋（東海大学）

14:30-15:10

アンデスにおける大地信仰の複層性

岡本年正（慶応義塾大学）

15:10-15:20

休憩

15:20-16:00

インカの起源神話再考察

佐々木直美（法政大学）

16:00-16:40

他界を見ながら暮らす：アレキパ県カスティーリャ郡ビラコ村の調査報告

上原なつき（名桜大学）

16:40-17:20

アレハンドロ・オルティスの神話学

加藤隆浩

17:20-18:20

総会

2 日目 (7 月 7 日[日])

司会：鳥塚あゆち (青山学院大学)

9:00-9:40

El Usted en peticiones: estrategia de atenuación en el español hablado en Medellín (Colombia)

Ji Son JANG (Universidad de Antioquia)

9:40-10:20

Educación multilingüe en Latinoamérica: el caso de la educación superior en Colombia

Ana Isabel García Tesoro (Universidad de Antioquia)

10:20-11:00

ペルー史から消えたヒターノ：“negro”の観念をめぐって

大平秀一 (東海大学)

11:00-11:10

休憩

11:10-11:50

ボリビアのリベラルタにおける日本人移住者：研究史料の整理

大島正裕 (立教大学ラテンアメリカ研究所)

11:50-12:30

ボリビア・ラレカハの農地改革 (3)

木村秀雄 (自由学園最高学部)

12:30-13:10

18 世紀半ばペルー・リマ地域の大震災と反乱計画の発生：レパルティミエント制を基礎として

真鍋周三 (兵庫県立大学)

13:10-13:15

閉会挨拶

アンデス・アマゾン学会会長 大平秀一

ペルー北部海岸地方の信仰と習俗にまつわる予備的考察：パイタにおける聖ペドロと聖パブロの祝祭をめぐって

河邊真次（三重大学非常勤講師）

キーワード： ママコーチャ、聖ペドロと聖パブロの祝祭、民間伝承、災害と信仰

Un estudio preliminar sobre creencias y costumbres en el litoral del norte peruano: en torno a la fiesta de San Pedro y San Pablo en Paita

SHINJI KAWABE (Mie University)

Keywords: Mamacocha, fiesta de San Pedro y San Pablo, tradiciones populares, desastres y creencias

はじめに

ピウラ県太平洋沿岸地域には先インカ期より先住民族タリャン（los tallanes）が居住し、モチエやチムーに従属しながらその社会文化的影響を受けてきた。インカ期には、ワイナ・カパックが沿岸地方の諸部族を帰順させて太陽信仰を広めたが、海岸地帯の先住民族の間では一般にママコーチャ（Mamacocha）すなわち「母なる海」が崇拝されていたことが複数の年代記に記されている [ガルシラーソ 1986[1963]: 66-67 他]。

他方、当該地域の住民の間では現在、ママコーチャなる語を耳にすることはなく、海が直接的な信仰対象として語られることもない。このことは、インカ期の神格のひとつであるパチャママ（Pachamama）が、程度の差こそあれ山岳地方で今なお信仰されていることと対照的である。本報告では、海にまつわる信仰の現代的諸相を解明するための予備的な考察として、沿岸地域における宗教的信仰の変遷とその実践状況の整理を目的とする。その一事例として、ピウラ県パイタ地区（以下、パイタ）及びその周辺村落の漁師たちから絶大な崇敬を集める聖ペドロと聖パブロの祝祭をめぐり習俗と伝承をとりあげる。

1. パイタの聖ペドロと聖パブロの祝祭

ペルー太平洋岸の市町村では、毎年6月29日にカトリックの守護聖人である聖ペドロと聖パブロの祝祭が広く祝われる。とりわけ、聖ペドロはイエスの第一の弟子かつローマ教会初代教皇であり、弟子となる以前の本業が漁師だったこと、イエスから「人間を漁（すなど）る漁師」になるという使命を授かったことなどの故事を通

じて、海に生きる漁師たちの守護聖人として篤い信仰を受けている。

Rivas Castillo [2002:8-9] によれば、パイタにおける聖ペドロと聖パブロの祝祭はおよそ2ヶ月前から準備が始まる。6月26日にはパイタ西部に位置するラ・プンタ区（La Punta）に仮設される礼拝所に両聖人像が運ばれ、多くの信者から絶え間ない訪問を受ける。また、礼拝所の入り口には巨大なアーチが立てられ、両聖人にはさまざまな供物が捧げられる。6月29日は早朝から両聖人像を輿に載せて市内を巡る聖行列が行われる。パイタの教区教会でミサを受けた後、両聖人像は埠頭で装飾を施された小型漁船に載せられ、他の漁船を従えて「湾内クルーズ（recorrido marítimo）」に出発する。沖合では海で命を落とした漁師たちの追悼のための花冠が海に投げられ、祝祭の後援者や船主たちは十分な飲食物を参加者に提供する。午後3時には両聖人像が船から降ろされ、ラ・プンタ区の礼拝堂まで再度聖行列が行われる。その後、夕刻から深夜かけて飲食を伴う華やかな祭りの雰囲気包まれる。

2. カトリック信仰と海との関連

パイタでは、1728年に当地に甚大な被害をもたらした数十年に一度クラスのエルニーニョ現象が、両聖人像の起源にまつわる伝承と関連づけられている。その中では、パイタの一漁村クニウス（Cuñús）が大波に飲み込まれることを住民に告げた聖母マリアの指示のもとに両聖像が制作され、奇跡的に完成した両聖像とともに住民が海路でラ・プンタ区へと移住を果たした歴史が語られる [Rivas Castillo 2003:5]。その意味で、

パイタの「湾内クルーズ」はその逃避行の追体験であり、また陸路での聖行列はラ・プンタへと逃れた人々が、埠頭の東にあったとされるクニウスへと象徴的に帰還する行事であると言える。

加えて、パイタは18世紀半ばまで英国私掠船の襲撃を断続的に受けてきた。中でも1741年のジョージ・アンソン（George Anson）の襲撃はパイタにもっとも深い傷跡を残した人的災害のひとつで、その歴史的事件はパイタの守護者であるメルセデスの聖母の伝承とともに現代に伝えられる。伝承によれば、同年11月24日のパイタ襲撃の際、アンソンは教会に侵入し、他の戦利品とともに聖母像を船に持ち帰った。すると、常に穏やかなパイタ湾が突如として荒れ狂い、アンソンたちは海を鎮めるために慌てて聖母像を海に投げ捨てて逃走した。翌朝、地元の漁師たちが海岸に打ち上げられた聖母像を発見し、荘厳な行列をもって聖母像を教会へと運んだ。住民は聖母がパイタを守ったのだと伝えあい、それ以降、聖母への信仰を強くしたのだという。

3. 考察とまとめ：災害と信仰

これら二つの伝承から、海に対する沿岸住民の態度がうかがえる。前者では、荒れ狂う海は自然の猛威としてパイタ住民に襲い掛かり、後者ではその猛威が敵対者である英国海賊に対して降りかかるという違いはあるものの、海は人知の及ばない力をもつ存在であるという認識に変わりはない。Buse de la Guerra [1977:618] は、このような海に対する沿岸住民の畏怖の感情は原初的なものであり、その猛威は神ないし海に関連のある何らかの神格の怒りの表れであると分析する。重要なことは、自然災害であれ人的災害であれ、海をめぐる危機的状況において加護を求め、良い結果に感謝をささげる対象が、植民地時代を経て海そのものからカトリックの神や聖人に置き換わってきた点であろう。

歴史的に見ると、ペルー沿岸地域では、人々は太古の昔から生計を支え、時に災害をもたらす海を崇拝し、畏れてきたことは多くの考古学的証拠や年代記記述から明らかである。また、Buse de la Guerra は、海の神の優位性については沿岸

住民の生計を支える経済的な性格と地理的な海との近さをから説明されるとし、その理由は海岸地方の諸民族が海に「依存し、彼らの経済を支配していたから」としている [ibid.:589]。

その後、16世紀にスペイン人の到来とともに導入されたカトリックは、土着宗教を排除・撲滅しながらこの地域でも広く布教された。その過程で土着の神格はカトリックの神や聖母、聖人と習合ないし序列化される形で再解釈されてきた。結果として、海は依然としてパイタ住民、とりわけ漁師にとって畏怖の感情と経済的恩恵をもたらす源泉であり続けている一方で、「母なる海」ママコーチャはその名と神性を失い、聖ペドロやメルセデスの聖母を介して間接的に畏敬の念や感謝が向けられる自然的存在へと定位されてきたものと理解できよう。

さらに、近年ではプロテスタント／福音派（以下、福音派）の伸長がパイタ地区住民の宗教生活を大きく変えてきた要因のひとつとなっている。福音派の宗教実践においてはさまざまな制約があり、とりわけ土着信仰的要素をもつ慣習やカトリック的慣習の禁止が特徴的である。実際、地区最大の崇敬対象であるメルセデスの聖母の祝祭が、集落によっては廃止された事例もある。このように、福音派が地区内で信者を増やすことで、カトリックのみならず先スペイン期の土着信仰的要素が表向きには徐々に廃れ、今後ますます水面下に追いやられていく可能性はあろう。この点については現在もなお進行中の宗教動態でもあり、今後さらに注目していきたい。

【主要参考文献】

- ガルシラーソ・デ・ラ・ベガ、インカ、1986[1963]、『インカ皇統記』二（大航海時代叢書エクストラ・シリーズⅡ）、牛島信明訳、岩波書店。
- Buse de la Guerra, Hermann, 1977, *Historia marítima del Perú*, Tomo II-Vol.1. Instituto de Estudios Historico-Marítimos del Perú, Lima.
- Rivas Castillo, Vidal, 2002, *El folklore: Tradiciones*. Edición privada, Perú.
- Rivas Castillo, Vidal, 2003, *El folklore: Leyendas paitenas*. Edición privada, Perú.

アンデスにおける大地信仰の複層性

岡本年正（慶應義塾大学等非常勤講師）

キーワード： 大地、パチャママ、アリユパ、クロニカ、カトリック

Plurality of the Land Worship in the Southern Andes

TOSHIMASA OKAMOTO (Keio University, Part-time lecturer)

Keywords: Land, Pachamama, Allpa, Chronicles, Catholicism

本発表は、前年の発表に続き、パチャママ信仰におけるパチャママがいかに捉えられているのか、そして大地信仰そのものとの関係を、その変遷と現状について考察することを目的とする。

前回発表では、パチャママそのものとパチャママが置かれている状況について、歴史的、民族学的、社会・政治的視点から分析した。パチャママは個別／局地的で具体的であり、かつ普遍的であるという二つの側面を同時に有しており、現代世界において、その普遍性がいかに発揮／利用されている。そこでのパチャママは、大地と同義であり、かつ自然環境全体へと昇華された存在となっている。その意味において、アンデス地域という地理的枠組みや民間信仰という宗教的枠組み、そして先住民文化という文化的枠組みを超えて普遍的存在として扱われている。

このようなパチャママの扱われ方において、パチャママと地球規模の大地がつながってきた経緯はいかなるものか、そもそもアンデス域内における地域的なバリエーションがあるのか／あったのか。これらアンデスにおける大地信仰のミクロな経緯を分析することで、現在のパチャママ信仰の隆盛がより考察できると考える。

いつからパチャママの語が用いられているかをさかのぼるには、文字資料としてのクロニカを参照するほかない。クロニカにおけるパチャママの記述に関しては、Daniela di Salvia による論考が参照できる。Di Salvia は、大地を「母」(madre) と関連付けた「最初」の記述を 1555 年の Agustín de Zárate のクロニカに見出し、女性性のある偶像（ワカと考えられる）を、1571 年の Pedro Pizarro の記述に見つけている [Di Salvia 2013:93]。また大地の偶像は、太陽と月とともに

守護者として祀られていることを、Cieza de León の 1553 年の記述などに言及している。そして大地が「太陽と月とともにすべてのものの母」であることや、Polo de Ondegardo の記述から、創造神であるヴィラコチャに続いて、太陽や星などとともにパチャママと呼ばれる大地が崇拝されていること、またそれがカマック・パチャ (Camac pacha) と呼ばれていることを見つけ出している。また 1613 年に Santacruz Pachacuti によって著されたクロニカ内の描画（太陽神殿コリカンチャにあったとされるもの）には、パチャママが大地として、そしてカマック・パチャとも記述されながらインカの世界観の一部とされている。

これらから、パチャママのイメージがクロニカを通して創られ、インカの世界観に統合される過程で地域性が消滅していった可能性がうかがえる。現代において、例えば Vitry は、パチャママは「生命を支えるために必要な自然的、物質的、象徴的な力の全てを携えている」[Vitry 2003:232] と分析しており、先の Santacruz Pachacuti の描画の延長として、パチャママが大地以上の存在として認識されていることがわかる。またカマック・パチャとは「カマックという生命のエネルギーを与える大地」を意味していることも、大地のみの表象を超えた神格であることを表している。

ところが、パチャママを辞書を見ると「耕作された大地だけ」を指し、「人間の労働の活動によって耕されたもの」とある。そうでなければ、アリユパ (allpa) と呼ばれており、そのアリユパは、悪い霊が宿っているとされている。つまり、パチャママはもともとすべての大地という意味合いはなく、人間が手を加えた大地のみを指すので

あり、耕作地から大地全体へと範疇が拡張されていったことになる。創造神に準ずるような存在、また自然環境全体や世界そのものを体現するものとは異なっていると言える。

このようにみえてくると、「パチャママ＝大地」とは常に言えない。ここでマルチスピーシーズ人類学の考えを援用して考察すると、人間、大地、パチャママという少なくとも3者がともにあり、アンデスの人々とパチャママの「絡まりあい」がアンデスの大地の上で行われ、そこで「大地＝パチャママ信仰」という一般的な観念が「発明」された可能性を指摘できる。この絡まりあいの度合いは様々であるが、次のように3つの認識に分類できるだろう。「大地＝パチャママ」「大地≡パチャママ」「大地≠パチャママ」。

「大地＝パチャママ」は一般的ななかかわり方と言え、パチャママを自然環境全体として拡張することができる。これがエクアドルやボリビアの法に言及されたパチャママであり、環境保護活動に取り上げられるパチャママである。また先住民文化を子供たちに教育する一貫で、やはり環境として守るべき大地＝自然として言及される場合も同様であろう。

「大地≡パチャママ」は、大地にかかわる人々のかかわり方であり、パチャママは手を加える相手としての大地である。事例として、都市クスコ郊外で行われた地鎮祭（2010年8月28日）を取り上げる。ここで行われたパゴ儀礼（大地に供物を捧げる儀礼）に際して、主催者の一人は「パチャママに伺いを立てないとパチャママが怒る」とし、パチャママを現実の主体として捉える。その一方、大地そのものから何かを受け取るということではなく、パチャママはすべてがうまくいくように祈る相手となっている。これは、パチャママは大地に属していながらも、大地にカマックを与える存在であり、主催者たちはパチャママを介して大地からの互酬（アンデス世界の秩序の形）の結果を受け取っていると言える。

「大地≠パチャママ」は、都市における人々（大地と直接かかわりを持たない人々）の実質的なパチャママとの関わり方である。パチャママが空腹であるためパゴ儀礼を行い、食事とし

て供物を捧げると言われるが、カトリック的な発想として神に供え物をするのと同様に、パチャママにお供えをして成功を得ようとしていると捉えられる。パチャママは大地を離れた神格として存在し、大地自体は生活世界であり、パチャママ信仰はもはや大地信仰ではない。パチャママの語がスペイン語からの語であり、「ヴィルヒナ」（*Wirhina*）がケチュア語での表現と考えるケチュア語（かつアイマラ語）話者がいるように[Howad-Malverde 1995:143]、カトリックとの混淆が多分に影響している。

ここまで見たように、現代世界におけるパチャママと大地、そして人々との関係が複数存在する源泉の一つに、クロニカを通してのパチャママの拡張があると言える。そしてパチャママは生産を行う場所としての大地であったり、生産物や成功を与える存在として、つまり神格としてのみのパチャママであったり、複数の認識のされ方をしている。この複層性が、現代世界における大地とパチャママの「取り違え＝多義性」であり、アンデス世界において農村部でも都市部でも大地信仰が続いている力の源泉であろう。

【主要参考文献】

- Di Salvia, Daniela, 2013, La Pachamama en la época incaica y post-incaica: una visión andina a partir de las crónicas peruanas coloniales (siglo XVI y XVII). *Revista Española de Antropología Americana* 43(1):89-110, DOI: http://dx.doi.org/10.5209/rev_REAA.2013.v43.n1.42302.
- Howard-Malverde, Rosaleen, 1995, "Pachamama is a Spanish word": Linguistic Tension between Aymara, Quechua, and Spanish in Northern Potosí (Bolivia). *Anthropological Linguistics* 37(2):141-168.
- Vitry, Christian, 2003, Fiesta nacional de la Pachamama: El ritual de alimentar a la tierra. In *Gastronomía y turismo: Cultura al plato*, edited by Gloria. C. Lacana, & Juana A. Norrild, pp.227-244, Centro de Investigaciones y Estudios Turísticos, Buenos Aires.

インカの起源神話再考

佐々木直美（法政大学）

キーワード： アヤル兄弟、塩（カチ）、断食、ケチュア語

Reconsideraciones de los mitos de los orígenes de los Incas

NAOMI SASAKI (Hosei University)

Keywords: *los hermanos Ayar, sal(cache/cachi), ayuno, quechua*

インカの起源について16～17世紀に複数のクロニスタがクスコ近郊にある洞窟から出現したアヤル兄弟姉妹の神話を記録している。たとえば、フアン・デ・ベタンソス『インカの物語』、シエサ・デ・レオン『インカ帝国史』、ペドロ・サルミエント・デ・ガンボア『インカ史』、インカ・ガルシラソ・デ・ラ・ベガ『インカ皇統記』、フェリペ・グアマン・ポマ・デ・アヤラ『新しい記録と良き統治』、ベルナベ・コボ『新世界の歴史』などが知られている。本発表ではこれらのインカ起源神話（以下「起源神話」）を詳細に分析した二つの先行研究エンリケ・ウルバノ『ウィラコチャとアヤル：英雄たちとアンデス諸社会における役割』（1981年）そしてゲイリー・アートン『神話の歴史：パカリクタンボとインカ族の起源』（1990年）を参照しつつ、起源神話の登場人物の名前についての新たな解釈の可能性、そして起源神話がインカ流断食と関係があることを指摘した。

起源神話における登場人物は「Ayar」兄弟と姉妹であるが、その人数については4人兄弟と4姉妹であるとする説と、3人兄弟と3姉妹であったという説があり、兄弟・姉妹内の年長順にも違いがある。その中でアートンが「もっとも詳しい記述の一つ」と評価し、ウルバノも基準的に参照しているサルミエントは、兄弟・姉妹の名前を長兄から順に「Mango Capac」「Ayar Auca」「Ayar Cache」「Ayar Uchu」、姉妹は長女から「Mama Ocllo」「Mama Guaco」「Mama Ipacura/Mama Cura」「Mama Rauwa (Rawa)」と記している。男性にだけ付いた「Ayar」が何を意味するかについて、ケチュア語で「aya」が「死体」を意味することからインカのミイラ信仰にもつながるとしてアー

トンもウルバノも「死体・亡骸」と結びつけているが、1608年のGonzález Holguínの辞書に記載され、アートンも言及しているとおり「ayar」は「野生種のキヌア」であることに発表者は注目した。長兄とされるMango Capacについて、「Capac」はHolguínの辞書には「kapac」＝「王」との記載がある。また「Mango」については、すでに複数の研究者がそれぞれ説を唱えるなかでウルバノはイネ科の植物「bromus mango」との関連よりもアイマラ語「manque（洞窟）」説を支持している。次男AucaについてHolguínの辞書は「aucca」＝「敵」、「auccay」＝「戦う」と掲載しており、先行研究においても異論はない。三男Cacheと四男Uchuについては、現在でもケチュア語において一般的に使用されている語であるためそれぞれ「塩」と「トウガラシ」を指すことに二つの先行研究は一致している。本発表では後述するように、まさに「cache」が「塩」、「uchu」が「トウガラシ」を指す一方で、複数のクロニスタたちが書き残したインカ流断食では塩とトウガラシの禁止が多くの場合並んで繰り返し言及されることと起源神話との関連の可能性を指摘した[Garcilaso 2009[1609]; Pizarro 1986 [ca.1571]]。姉妹の名前にはすべてケチュア語でも「母」を意味する「mama」が付いている。後にMangoの妻となりCinchi Rocaを産んだOclloについてウルバノはアイマラ語に「腫れたモノや人」を表す「occllo」があること、ケチュア語ではHolguínが「オタマジヤクシ」を「hullque」または「hocollo」と記していることを指摘し、アートンも「丸々とした」形を指すとして両者は容姿に関する解釈を提示している。しかしHolguínは「ocllay cuni」の項目を立てて「何かを胸に抱くこと」、「ocllac

atahuallpa」を「抱卵する雌鶏」(「*atahuallpa*」は「雌鶏」)としていることから、*Ocllo* の容姿ではなく、その役割を表しているとも考えられる。乱暴で残忍な性格として神話で語られる *Guaco* の名前については、ウルバノはケチュア語とアイマラ語を参照し、「曾祖母」や「勇壮な女性」などを指すいくつかの語との関連を示唆しているが、神話が由来となって、その言語で一般的に使われるようになった可能性も見過ごせない。とくに人の性格や地位については、神話由来というのは考えやすいであろう。他方でウルバノが加えて言及しているケチュア語の「*guaco/wako/waku*」は「罨法剤として使われた植物」との指摘があり、報告者はこの植物と猛々しい *Guaco* との関連を支持する。三女の *Ipacura*(*Cura*)についてウルバノは、ケチュア語で「*ipa*」が「叔母・伯母」を指し「*cura*」は「去勢」との関連を示唆するが、Holguín が採録した「*kulla*」が「無邪気な幼い年」を意味することのほうが、神話における姉妹順から考えると妥当性が高いように思える。四女 *Rauwa*(*Rawa*)については二つの先行研究は同様に、ケチュア語にもアイマラ語にも関連する意味が見つからないと述べている。しかし、ケチュア語表記において「r」と「l」が混同される例は、Julio Calvo Pérez によるケチュア語辞書 *Nuevo Diccionario* [2022] に見られることから「*rawa*」が「*lawa*」である可能性も考えられる。「*lawa*」はアイマラ語では「薪」を表し、ケチュア語では「*laway*」が「スープを作る」という意味である。ベタンソスのクロニカでは、姉妹たちは洞窟から出現した際に金製の食器や鍋を持ち出したことが記されている。

本発表では、起源神話の登場人物の名前は、インカの王国を築くために重要とされた役割を象徴していると述べた。ウルバノは、途中で洞窟に返されて生き埋めにされた *Cache* を除く 3 人の兄弟について神話の内容からそれぞれの役割を指摘した。子孫を残した *Mango* は政治、旅の途中で石になった *Uchu* は信仰・宗教、そして居留地の確保を任された *Auca* は農業を担ったとする。しかし、*Auca* は「敵」や「戦い」に関連するため「軍事」を担当し、ウルバノが役割から外した

Cache (塩)こそが、自然の恩恵を象徴し農業を含めた「生業・経済」を担ったとも考えられる。ガルシラソは塩について「インカがインディオたちに伝えた自然の生活に従った教え」の象徴であると述べている [Garcilaso 2009]。塩が「インカの教え」を象徴するとするならば、インカ王やその民が行った断食において塩とトウガラシがともに避けられる理由は何だったのか。起源神話の登場人物と同名の食物に対して、インカは特別な意味を持たせていたとしたら、現代のアンデスにおいて塩が持つ文化的意味との関係はどのようなものか。塩が象徴する「自然の生活に従った教え」のなかに込められたアンデスの民が育んできた「人間」と「自然」との関係を知る手掛かりとして、インカ起源神話へのアプローチを試みた。

【主要参考文献】

- Garcilaso de la Vega, El Inca, 2009[1609], *Primera parte de los comentarios reales*. Biblioteca Virtual Miguel de Cervantes, Madrid.
<https://www.cervantesvirtual.com/obra/primera-parte-de-los-commentarios-reales-qve-tratan-del-origen-de-los-yncas-reyes-qve-fveron-del-perv-de-sv-idolatria-leyes-y-gouierno-en-paz-y-en-guerra-de-sus-vidas-y-conquistas-y-de-todo-lo-que-fue-aquel-imperio-y-su-republica-antes-que-los-espanoles-p>
- González Holguín, Deigo, 1989[1608], *Vocabulario de la lengua general de todo el Perú llamada lengua Qquichua*. Universidad Nacional Mayor de San Marcos, Lima.
- Pizarro, Pedro, 1986[ca.1571], *Relación del descubrimiento y conquista del Perú*. PUCP, Lima.
 DOI: <https://doi.org/10.18800/F3499119>
- Urbano, Henrique, 1981, *Wiracochay Ayar : Héroes y funciones en las sociedades andinas*. Centro de Estudios Rurales Andinos “Bartolomé de Las Casas”, Cusco.
- Urton, Gary, 1990, *The History of a Myth: Pacariqtambo and the Origin of the Inkas*. University of Texas Press, Texas.

他界を見ながら暮らす：アレキーパ県カスティージャ郡ビラコ村の調査報告

上原なつき（名桜大学）

キーワード： コロプナ、カパコチャ、生贄、水儀礼、水路掃除祭り

Vivir mirando el Otro mundo: Informe de Viraco, Distrito de Castilla, Provincia de Arequipa **NATSUKI UEHARA (Meio University)**

Keywords: Coropuna, capacocha, sacrificio, culto del agua, la faena

今回の発表は、前半はアレキーパ県カスティージャ郡を中心に、コロプナ山周辺で実施した現地調査の報告である。後半は、バルデラマとエスカランテ [1997] のコルカ谷の説話集から山に関する説話をいくつか紹介し、今後の調査課題について検討する。

発表者はこれまでアブリマック県アンタバンバ郡を中心に、カトリック祭祀である「死者の日」および他界に関する語りについて調査を行ってきた。アンタバンバでは死後、死者の霊魂はコロプナ山の山頂にあるアヤワシ（死者の家）に行くと言われる。コロプナ山は隣県のアレキーパ県に実在する、万年雪を戴く標高 6377m の火山である。しかし、アンタバンバからは遠方にあるため、その山嶺すらも見ることができない。

アンタバンバの山上他界観を踏まえ、実在する山ではあるものの遠方だからこそ他界と考えられているのであろうかと発表者は疑問を抱いた。そこで、コロプナ山周辺に暮らす人々は目の前にある身近な山を同様に他界と考えているのか、または異なる観念や習俗があるのかを調査した。また、クロニカによれば、インカ期にはコロプナ山は重要な聖山のひとつであったと記録されており、周辺には現在も複数の遺跡が残っている。よって、山だけでなく遺跡に対する人々の認識についても調査を行った。

アレキーパ県カスティージャ郡パンパコルカにはマウカリヤクタ遺跡があるが、ここでは「フアニータ」と同様に、かつてはコロプナ山へ生贄を捧げる儀礼が行われていたと当地の人々は語る。「フアニータ」とは冷凍状態で発見された少女のミイラで、インカ期にアンパト山の山頂でカパコチャすなわち生贄として捧げられたもの

である。また、パンパコルカの人々がマウカリヤクタ遺跡でかつては生贄が捧げられていたと考える理由のひとつとして、近郊に先インカ期の岩絵が残された洞窟があり、そこで発見されたミイラが村内の博物館に展示されていることが挙げられる。

インカ期、生贄はカパコチャと呼ばれたが、考古学者サブチックはカパコチャとはカパック・コチャの 2 語から構成されていることを示唆する [Sobszyk 2022:81]。カパックは「力のある、裕福な、豊富な、重要な、名高い、貴族の、王の、聖なる」という意味であり、コチャは「海、湖、泉、貯水池」という意味がある [González Holguín 1989[1608]:65; Millenium Editora Global 2009:358, 372]。カパック・コチャは「王の湖」ないし「聖なる湖」「豊富な湖」と訳すことができる。すなわち、豊富な水をもたらすよう山に祈るため、少女の生贄が捧げられたと考えられる。他にもカパコチャ／カパック・コチャと水の関連を示すものとして、スポンディルス貝で作製された人形の副葬品が挙げられる。スポンディルス貝とは赤道付近の海岸部で採れる貝で、コチャとの関連性を示すものである。この人形は生贄の少女と同じ服装をしており、生贄を模したものであることがわかる。また現在においても、アレキーパ県では水不足になると、海岸から海水を汲んできて山頂の湖に注ぎ入ると豊富な水がもたらされるといわれる。貝および海水が湖の水を豊富にすると考えられていることから、貝で作られた生贄を模した人形もまた、神に水を乞うための供物といえる。

次に、アレキーパ県ラ・ウニオン郡にあるアヤワシ (Ayahuasi) という村である。この村からも

コロプナ山を眺めることができる。アヤ (aya) は「死者」、ワシ (huasi, wasi) は「家」を意味する。この村の名称の由来もコロプナ山を他界と考えることと何かしらの関連があると推測するが、現段階ではまだ調査できていない。

最後に、先述したパンパコルカの近くにあるビラコである。ここにもカンパナヨクというインカ期の遺跡がある。

ビラコのアルマス広場から見ると、ちょうどコロプナ山と重なるようにカトリック教会が建っている。また、教会の敷地内にはビラコの守護聖人であるサンタ・ウルスラの小聖堂が二つあり、これらもコロプナ山と重なるように配置されている。さらに、二つの小聖堂はコロプナ山を象ったと思われる白い山型の形状となっている。つまり、人々が教会およびサンタ・ウルスラに祈ると、同時にコロプナ山へも祈るような空間配置となっている。また、ビラコのカトリック墓地には山型の墓が 1 基あることが観測できた。このことから、死者とコロプナ山の関連性が読み取れるが、今回の調査では明らかにすることができなかったのが今後の調査課題としたい。

さらに、ビラコではコロプナ山をリンボ (Limbo) と呼ぶ人もいる。リンボとはカトリックの他界のひとつ、地獄の辺境のことである。リンボには洗礼を受ける前に亡くなった子供や旧約時代の善人が行くとされる。なぜコロプナ山をリンボと呼ぶのか、カトリックの他界と山上他界がどのように関連するのかは今後さらに調査する予定である。

今回の調査ではコロプナ山に関する説話を蒐集することができなかったのが、参考として、コロプナ山に程近いコルカ谷周辺で説話を蒐集したバルデラマとエスカランテ [1997] の説話集から、山に関連する説話をいくつか検討した。

女性である山と村のクラーカ (貴族) の結婚によって、山から村にあるヘンティレス (先スペイン期の死者、村の祖先) の墓まで水路が引かれた説話、水路の取水口が壊れたために男女ペアで子供 2 人を生贄に捧げたら、その後は壊れることなく水がもたらされるようになった説話、ミスティ山からもたらされる美しい水はミスティ

山の小便で、その小便が農作物を育てるという説話、水路掃除祭り (La Faena) では男性たちは音楽や音によって山から水を導き、女性たちは山を性的に誘惑しながら駆け下りて水を村まで導く説話などを紹介した。

これらの説話から、現在では処女の生贄カパコチャ/カパック・コチャは行われなくなったものの、人間の女性が山と結婚ないし性的関係を結ぶことで山から村まで水がもたらされ、山の小便ないし精液である水が農作物を育てる生命力を持つという観念があると考えられる。

実際に、アプリマック県アンタバンバで 8 月に行われるマユラ (mayura) という水路掃除に関連する祭りでは、女性たちが山頂の湖にある取水口を開き、水路を流れる水とともに山から駆け下りる。また、色とりどりに飾り付けした木を持って女性たちが大地を打ち鳴らす行為も、音によって水を導いていると考えられる。

以上のことから、今後はコロプナ山、他界、死者、生贄、水、音がどのように関連するのかをさらに調査予定である。

【謝辞】

本研究は、JSPS 科研費：課題番号 20K01232 「アンデス高地における海の文化」(代表者：加藤隆浩) の助成を受けたものです。

【主要参考文献】

- González holguín, Diego, 1989[1608], *Vocabulario de la lengua general de todo el Perú llamada lengua Qquichua o del Inca*. Universidad Nacional Mayor de San Marcos, Lima.
- Millenium Editora Global, 2009, *Diccionario Quechua-Español/Español-Quechua*. MMVIII Millenium Editora Global S. A. C., Perú.
- Sobszyk, Maciej, 2022, *Apu Coropuna: Entornos arqueológicos en un oráculo andino: Maucallacta*. UCSM/CEAUV/Ediciones El Lector S. R. L., Lima.
- Valderrama, Ricardo y Carmen Escalante, 1997, *La doncella sacrificada: Mitos del valle del Colca*. UNSA/IFEA, Arequipa.

アレハンドロ・オルティスの神話学

加藤隆浩

キーワード： アレハンドロ・オルティス、神話、アダネバ、インカリ、ワロチリ

Andean Mythology by Alejandro Ortiz

TAKAHIRO KATO

Keywords: Alejandro Ortiz, myth, Adaneva, Inkari, Huarochiri

アンデス世界は口頭伝承の宝庫である。アンデス地域とりわけペルーでは20世紀初頭から今日に至るまで各地で地域の説話が書籍などとして紹介され、郷土愛の深さを競うかのように矢継ぎ早に刊行されている。それがペルー独特の地域主義に根差すアイデンティティ、インディヘニスモと結びつき、地域における説話の掘り起こしと刊行という形で勢いづくこともある。

ペルーにおける説話ブームは、公教育とも緊密に結びつき、文化庁長官に就任したホセ・マリア・アルゲダスが、ペルー全土の教員に「説話コンクール」を呼びかけ、結果として全国から数万編以上の説話を蒐集した。そしてそれらを採集地に合わせ、海岸部・山間部・森林地域に分類し、地域差が浮き上がるような説話を選んで出版（ホセ・イスキエルドとの共編で、ペルー共和国・文部省の刊行物『ペルーの神話、伝説、昔話』1947）された。この試みは大成功をおさめ、説話への関心はますます高まった。

説話が決定的なブームになったのは1950年代であった。ペルーの海岸部と山間部で採話されたものが次々に刊行され、初めは雑誌の中のコラム的扱いだったが、すぐに説話だけで単行本が編まれるようになった。また、学術雑誌にも取り上げられるようになった。ブームを担ったのは、ホセ・マリア・アルゲダス、エフライン・モロテ・ベスト等で、国際学会や国際的な学術雑誌への投稿を活発に行い、説話がペルー人類学、民俗学研究の中心テーマの一つであると、国内外の研究者に印象づけた。

60年代、70年代に入ると説話に関する出版物はより洗練され、先住民言語とスペイン語の対

訳をつけるなど工夫が見られるようになる。ただ残念なことに、説話をどのように研究すればよいかの議論が欠けており、モロテ・ベストのような例外はあるにせよ、収集した説話をテーマごとに並べる程度の「研究」にとどまった。

そこで登場するのが、本発表の中心となるアンデス神話研究の開拓者アレハンドロ・オルティスである。彼はサン・マルコス大学でアルゲダスの薫陶を受け、アンデスの説話、とりわけインカリ神話に関心を持った。説話は文化や社会を理解するための要であると考えていたアルゲダスは、ペルーにその専門家がいなかったことを残念に思い、エキスパートを育成すべく、若きオルティスをフランスのレヴィ＝ストロースの元に送りこみ、神話の構造分析を学ばせた。アルゲダスのオルティスにかける期待は大きかったと見え、「この説話はいずれ構造主義によって分析されるだろう」と自分の論考に予告めいた言葉を付記することさえあった。オルティスは、師の期待通り学位を修得し、その論文は『アダネバからインカリへ』として、ペルー初の本格的な神話分析の書となった。しかし、これは、オルティスにとっては、まだ半分の分析に過ぎなかった。そこで彼は7年後に同著の続編、姉妹本を刊行する。

ただ、この後発の書『ワロチリ、400年後』は、人目につかず、不当にも多くの読者をえないまま絶版となってしまった。しかし議論を先どりすれば『アダネバからインカリへ』とこの本と2冊を理解しなければ、われわれの最終目標である、オルティスの神話学を理解したことにはならない。

ではオルティスは、その著作にどのような問題意識を込めていたのか。彼自身の説明によれば、『ワロチリ、400 年後』の目的は、以下の事柄を指摘することにあったという。すなわち、オルティス自身が現在のワロチリ高地で蒐集した神話と、16 世紀末に記録されたアビラ神父の著作（ワロチリ神話）とを比較し—この着想はもともとドゥヴィオールのものであった、とオルティスは告白している [Ortiz 1980:12] —400 年の隔たりにもかかわらず、「ワロチリの高地の人々が神話を伝承してきたということを実証し、流動的な神話にはつきものの「変換」や「変化」を指摘しながら、同時にそこで取りあげられる神話群がある特定の構造に忠実であることを示す」 [Ortiz 1980:13] ことにあったという。そしてオルティスは、そうした視座に立つと同時に、取り扱う神話に「ワロチリの」という限定条件をつけることで「神話の一貫性を呈示し、他の表象（たとえば宗教・呪術的表象や、儀礼）に対して神話の独自性の度合いを示し、「その作業を通して今日なおアンデス文化との評価を与えうるその文化の働きや特徴を決定するのに寄与すること」が可能となるとする。

だとすれば、オルティスの『ワロチリ、400 年後』の目論見は、時間を経た連続性を明らかにすることであり、それは前著『アダネバからインカリへ』で限定されたアンデスという空間性との相互関係の中で読み解くものということになる。

その様にして初めて「古くから根気よく議論されてきたアイデンティティの問題に行きつき」 [Ortiz 1980:14]、ワロチリ地方を代表させる形ではあるが「アンデス的なもの」の問題に帰着するというわけである。

【主要参考文献】

- Ortiz, Rescaniere Alejandro, 1973, *De Adaneva a Inkari*. Retablo de Papel Ediciones, Lima.
- Ortiz, Rescaniere Alejandro, 1980, *Huarochirí, 400 años después*. Pontificia Universidad Católica del Perú, Lima.

El *usted* en peticiones: estrategia de atenuación en el español hablado en Medellín (Colombia)

JI SON JANG (Universidad de Antioquia)

Palabras claves: Usted en peticiones, pragmática sociocultural, cortesía, atenuación, español de Medellín

The *usted* in requests: a strategy of mitigation in the Spanish spoken in Medellín (Colombia)

Keywords: Usted in requests, sociocultural pragmatics, politeness, mitigation, Medellín Spanish

Las fórmulas o formas de tratamiento en el mundo hispanohablante es un fenómeno interaccional sumamente relevante ya que, a través del uso de unas u otras formas de tratamiento, se comunica expresamente la intención cortés o descortés del hablante hacia el oyente [Braun 1988; Bravo 2001; Jang & García 2023; Iglesias 2001; Jang 2012b], y existe el riesgo de que se genere una situación conflictiva debido a una selección pronominal inadecuada, incluso entre interlocutores nativos de la misma lengua [Blas 2005; Hummel 2010; García & Jang 2022; Páez 1981]. Considerando este aspecto se han llevado a cabo numerosos estudios sobre el tema en el mundo hispanohablante, que han puesto de manifiesto la complejidad y diversidad de los procesos de selección pronominal en función de los contextos en los que se emplee y las diferencias diastráticas y diatópicas de cada variedad de español [Blas 1995, 2003; Jang 2012a; Jang & García 2021; Molina 2021; Serrano 2000].

En el presente trabajo abordamos uno de los casos presentados en Jang [2012a], el uso de *usted* que se emplea en actos de habla *peticiones* como estrategia de atenuación entre personas cercanas en el español hablado en Medellín (Colombia). Hemos realizado un análisis con datos actualizados obtenidos a partir de una encuesta sociolingüística realizada a 843 informantes. La población estudiada está constituida por informantes de edades comprendidas entre los 18 y los 81 años. Desde un punto de vista teórico, la investigación se basa en la noción de cortesía [Brown y Levinson 1987], el concepto de

atenuación [Albelda 2016; Briz 1995; Cestero & Albelda 2020], la perspectiva de la sociolingüística variacionista [Labov 1972, 2007] y la pragmática sociocultural [Bravo & Briz 2004]. Las variables sociales tenidas en cuenta en este trabajo son el estrato socioeconómico, el sexo y la edad. Como conclusiones podemos enumerar los siguientes aspectos: 1) el *usted* en peticiones como estrategia de atenuación tiene una vigencia considerable; 2) cuando el grado de imposición de una petición es alto, se apela a esta estrategia de atenuación con mayor frecuencia; 3) los informantes más jóvenes de clase alta emplearían en menor medida esta estrategia, lo cual implica que este fenómeno se encuentra en proceso de cambio lingüístico, con posibilidad de que se debilite paulatinamente en esta comunidad de habla.

【Referencia principal】

- Albelda, M., 2016, Sobre la incidencia de la imagen en la atenuación pragmática. *Rili* 27: 19-32.
- Blas, J., 1995, Los pronombres de tratamiento y la cortesía. *Revista de Estudios Hispánicos* 22: 439-466.
- Blas, J., 2003, Perspectivas (socio)lingüísticas complementarias en el estudio de la variación y el cambio lingüístico en español. *Estudios de Sociolingüística* 4(2): 653-692.
- Blas, J., 2005, Los grados de la cortesía verbal: reflexiones en torno a algunas estrategias comunicativas y recursos lingüísticos en el español peninsular contemporáneo. *Rili* 3, 1(5): 9-29.

- Braun, F., 1988, *Terms of address. Problems of usage in various languages and cultures*. Mouton de Gruyter, Berlin.
- Bravo, D., 2001, Sobre la cortesía lingüística, estratégica y conversacional en español. *Oralia* 4: 299-314.
- Bravo, D. & Briz, A., 2004, *Pragmática sociocultural: estudios sobre el discurso de cortesía en español*. Ariel, Barcelona.
- Briz, A., 1995, La atenuación en la conversación coloquial. Una categoría pragmática. En *El español coloquial. Actas del I simposio sobre análisis del discurso oral*, L. Cortés (ed.), pp. 103-122, Universidad de Almería, Almería.
- Brown, P. & Levinson, S., 1987, *Politeness. Some Universals in Language Usage*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Caffi, C., 2007, *Mitigation*. Elsevier, Oxford.
- Cestero, A. & Albelda, M., 2020, Estudio de variación en el uso de atenuación I: Hacia una descripción de patrones dialectales y sociolectales de la atenuación en español. *Signos* 53(104): 935-961.
- García, A. & Jang, J., 2022, Consideraciones acerca de la noción de 'usted' de solidaridad en el español hablado en Medellín (Colombia). *Signos* 55 (108): 212-234.
- Hummel, M., 2010, Reflexiones metodológicas y teóricas sobre el estudio de las formas de tratamiento en el mundo hispanohablante, a partir de una investigación en Santiago de Chile. En *Formas y fórmulas de tratamiento en el mundo hispánico*, M. Hummel et. al. (ed.), pp. 101-162, Colegio de México, México DF.
- Iglesias, S., 2001, Los estudios de la cortesía en el mundo hispánico. Estado de la cuestión. *Oralia* 4: 245-298.
- Jang, J., 2012a, Cambio pronominal momentáneo en las relaciones interpersonales solidarias en los jóvenes universitarios de Medellín (Colombia). En *Miradas multidisciplinares a los fenómenos de cortesía y descortesía en el mundo hispánico*, J. Escamilla et. al.(ed.), pp. 178-212, Universidad del Atlántico-Programa EDICE, Barranquilla.
- Jang, J., 2012b, La dinámica de la alternancia entre *tú*, *vos* y *usted* en Medellín (Colombia) desde la teoría de la acomodación comunicativa. *Forma y Función* 25 (1): 129-144.
- Jang, J. & García, A., 2021, ¿Cómo se expresa el enfado en Medellín (Colombia) a través de la selección pronominal?. En *Actas de X Congreso Asiático de Hispanistas*, W. Yoo et ál.(ed.), pp. 357-371, Universidad Hankuk de Estudios Extranjeros, Seúl.
- Jang, J. & García, A., 2023, Pragmática sociocultural del tuteo en el español hablado en Medellín (Colombia): caracteres refinado, cariñoso y afeminado. *Bulletin of Hispanic Studies* 100 (6): 583-600.
- Labov, W., 1972, *Sociolinguistic Patterns*. University of Pennsylvania Press, Philadelphia.
- Labov, W., 2007, Transmission and Diffusion. *Language* 83 (2): 344-387.
- Molina, I., 2021, Cambio lingüístico y transformación social: formas y fórmulas de tratamiento en España (1860-1940). *Rili* 19, 2 (38): 173 -195.
- Páez, I., 1981, *Historia y geografía hispanoamericana del voseo*. La casa de Bello, Caracas.
- Serrano, M., 2000, La producción de la cortesía verbal y la deixis socio-comunicativa. *Oralia* 3: 199-219.

Educación multilingüe en Latinoamérica: el caso de la educación superior en Colombia

ANA ISABEL GARCÍA TESORO (Universidad de Antioquia)

Palabras claves: Educación superior, multilingüismo, política lingüística, Colombia, lenguas indígenas

Multilingual Education in Latin America: Higher Education in Colombia

Keywords: Higher Education, Multilingualism, Linguistic Policy, Colombia, Indigenous Languages

Colombia es un país con una gran diversidad lingüística, donde se hablan, además del español como lengua oficial, 65 lenguas indígenas, 2 criollos, portugués y romaní; así mismo, el inglés es lengua oficial en las islas de San Andrés, Providencia y Santa Catalina. Las 65 lenguas indígenas (que cuentan con 400.000 hablantes aproximadamente) que existen en Colombia en la actualidad pueden ser agrupadas en 12 familias lingüísticas, y hay 10 lenguas aisladas no clasificadas todavía. Las familias lingüísticas son: la gran familia lingüística chibcha, de probable origen centroamericano; las grandes familias de Sudamérica, arawak, caribe, quechua y tupí; y 7 familias presentes a nivel regional (chocó, guahibo, saliba, nadahup, witoto, bora, tucano). Las 10 lenguas aisladas son: andoque, awa pit, cofán, misak, kamentsá, páez, ticuna, tinigua, yagua, yaruro [González de Pérez & Rodríguez de Montes 2000; Landaburu 2000, 2004, 2005]. Se hablan igualmente dos lenguas criollas en el país. La primera es el criollo de San Andrés (72.000-100.000 hablantes), hablado en las islas de San Andrés, Providencia y Catalina. El segundo criollo es el palenquero (6.637 hablantes), hablado en San Basilio de Palenque. Finalmente, existe una importante comunidad romaní formada por unos 8.000 colombianos de descendencia romaní, que están distribuidos en varias regiones del país. Lograron en 1999 el reconocimiento como minoría étnica por parte del Estado colombiano. La lengua romaní también ha sido reconocida como lengua minoritaria.

La política lingüística en un país tan diverso está amparada en la Constitución de 1991, que reconoce la

diversidad lingüística del país, así como la co-oficialidad de otras lenguas en los territorios donde se hablan (*ARTICULO 7. El Estado reconoce y protege la diversidad étnica y cultural de la Nación colombiana. ARTICULO 10. El castellano es el idioma oficial de Colombia. Las lenguas y dialectos de los grupos étnicos son también oficiales en sus territorios. La enseñanza que se imparta en las comunidades con tradiciones lingüísticas propias será bilingüe*), y en leyes como la Ley 1381 de 2010, “El primer instrumento, diseñado con participación de líderes y comunidades nativas, es la Ley 1381 de 2010: por la cual se desarrollan los artículos 7°, 8°, 10° y 70° de la Constitución Política, y los artículos 4°, 5° y 28° de la Ley 21 de 1991 (que aprueba el Convenio 169 de la OIT sobre pueblos indígenas y tribales), y se dictan normas sobre reconocimiento, fomento, protección, uso, preservación y fortalecimiento de las lenguas de los grupos étnicos de Colombia y sobre sus derechos lingüísticos y los de sus hablantes.” [Ospina Bozzi 2015, 7], que en su artículo 5° reconoce el derecho a usar las lenguas indígenas: *Artículo 5°. Derecho de uso de las lenguas nativas y del castellano. Los hablantes de lengua nativa tendrán derecho a comunicarse entre sí en sus lenguas, sin restricciones en el ámbito público o privado, en todo el territorio nacional, en forma oral o escrita, en todas sus actividades sociales, económicas, políticas, culturales y religiosas, entre otras.*

Así, en la Universidad de Antioquia, la segunda universidad pública del país, en el Acuerdo Académico 334 del 20 de noviembre de 2008, por el

cual se establece la política de competencia en lengua extranjera y segunda lengua para los estudiantes de pregrado y posgrado, reconoce en su artículo 4 el español como segunda lengua para los estudiantes procedentes de comunidades indígenas (y extranjeros no hispanohablantes) y requiere superar un examen de español como requisito de graduación, en lugar de exigir superar un examen en inglés u otras lenguas modernas, como se hace para los estudiantes hispanohablantes: *ARTÍCULO 4. Para los estudiantes de las comunidades indígenas y para los extranjeros, cuya lengua materna no es el español, se da cumplimiento al requisito con la aprobación de una prueba de competencia lectora en español, que será administrada por la Facultad de Comunicaciones.*

Igualmente, se han tomado otras medidas para promover la inclusión de grupos minoritarios, aunque los resultados son limitados. Respecto a la política de deserción, existe la política lingüística de reconocimiento de español como segunda lengua para los estudiantes procedentes de comunidades indígenas, pero no un monitoreo de los estudiantes bilingües y las tasas de deserción (entre 7-9% en los últimos años) entre los mismos. De esta forma, en ocasiones ocurre un shock lingüístico y cultural entre los estudiantes indígenas [Sito & Kleiman 2017], quienes hablan unas variedades de español influenciadas por el contacto con las lenguas de sus comunidades, lo que añadido a que en muchos casos el español es su segunda lengua, hace que tengan dificultades en el manejo del español académico, lo que da lugar a deserción, fracaso académico y situaciones de discriminación, entre otros.

Gracias a las investigaciones de contacto realizadas a partir de muestras de lengua oral se conocen mejor las variedades de español habladas en las comunidades indígenas en Colombia (así como en otros países hispanoamericanos), y se va desentrañando cómo ciertos patrones de las lenguas indígenas se han ido transfiriendo al español local de manera continuada. Desde 2021 además la Facultad de Comunicaciones y Filología ofrece cursos de

español para hablantes de otras comunidades, en los que se reconocen las necesidades de formación en español como segunda lengua para: *Estudiantes de las comunidades indígenas que ingresan al pregrado en Licenciatura en Pedagogía de la Madre Tierra. Estudiantes de las comunidades indígenas, negras, palenqueras o raizales que ingresan a diferentes programas de la Universidad*, de esta forma se reconoce el español como segunda lengua en estos estudiantes y se implementan cursos que tratan de apoyarlos con la lectura y escritura en español académico

【Referencia principal】

- Fandiño, Y. & Bermúdez, J., 2016, Planificación y política lingüística en Colombia desde el plurilingüismo. *Revista Universidad de la Salle* 2016(69): 137-155.
- González de Pérez M.S. & Rodríguez de Montes M.L. (Eds.), 2000, *Lenguas indígenas de Colombia, una visión descriptiva*. Instituto Caro y Cuervo, Bogotá.
- Landaburu, J., 2000, Clasificación de las lenguas indígenas de Colombia. En *Lenguas indígenas de Colombia, una visión descriptiva*, pp.3-22, Instituto Caro y Cuervo, Bogotá.
- Landaburu, J., 2004, La situación de las lenguas indígenas de Colombia: prolegómenos para una política lingüística viable. *Open Editions Journal* 546(10): 1-14.
- Landaburu, J., 2005, Las lenguas indígenas de Colombia: presentación y estado del arte. *Amerindia* 29/30: 3-22.
- Ospina Bozzi, A.M., 2015, Mantenimiento y revitalización de lenguas nativas en Colombia. *Forma y función* 28(2): 11-48. DOI: <http://dx.doi.org/10.15446/fyf.v28n2.53538>.
- Sito, L. & Kleiman, A., 2017, “Eso no es lo mío”: un análisis de conflictos en la apropiación de prácticas de literacidad académica. *Universitas Humanística* 83: 159-185.

ペルー史から消えたヒターノ：“negro”・“mulato”等の観念をめぐる

大平秀一（東海大学）

キーワード： アンデス先住民、ロマン人、「ジプシー」（カレ、カロ）、16 世紀、民族音楽

Gitanos desaparecidos en la historia del Perú: problemas de palabras de “negro” y “mulato”

SHUICHI ODAIRA (Tokai University)

Keywords: *Nativos Andinos, Romani, “Gypsy” (Calé, Caló), Siglo XVI, Música folklórica*

「発見」・「征服」の時代以後に新世界に渡ったロマン人・ヒターノ（「ジプシー」）に関しては、これまでほとんど着目されてこなかった。15～16 世紀のスペイン社会の状況、新世界発見のプロセス、そして歴史文書等の考察を進めると、アンデス地域にも相当数が渡ったことは疑問の余地がない。民族誌に目を向けると、先住民社会への影響も少なくないように思われるものの、ヒターノという名称を伴う文書の記述は、極めて少ない。本報告では、アンデス先住民社会で継承されてきた歌に着目し、両者の接触・共存の可能性の一端を示した。その上で、ヒターノがペルー史から消されてしまう要因の一部を指摘した。

ヒターノは、遅くとも 1425 年にはイベリア半島に姿を現している。彼らは、ローマ教皇から改悛を命じられた書状なるものを携え、それにより国王や貴族・領主の通行許可証を得て自由に移動していた。しかしながら、1499 年の勅令（*Pragmática*）により追放が命じられた後、彼らは一貫して排除され、アルマデン鉱山での労働やガレー船奴隷として酷使されている。彼らを規制する法令の発行は、スペイン全体で 250 以上にも及ぶと考えられている。

こうした状況下で、大西洋に隔てられ、人目の及びにくい土地に満ちた新世界は、身を隠す格好の場となり得る。遅くともコロンの第 3 回航海（1498）により、少なくとも 4 名のヒターノが新世界に渡っている。

一方で、1503 年にはインディアス通商院（*Casa de Contratación de Indias*）が設立され、宗教改革の激化する 1517 年以後は、厳しい渡航規制が敷かれるようになる。ただし 1511-1517 年は、誰もが渡航できる状態にあったし、それ以後も法が

必ずしも厳格に機能しておらず、すり抜ける様々な方法があった [Friede 1952]。

新世界の文書では「漂泊者」（*vagabundos*）に言及したものが少なくないものの、ヒターノという固有名詞を伴っているわけではない。しかしながら、その「漂泊者」の中に彼らが含まれていたことは、法令を通して確認できる。新世界では、『法令集』（*Cedularios*, 1596）、『インディアスの諸王国法令集』（*Recopilación de Leyes de los Reynos de las Indias*, 1680）が編纂されている。後者の第 2 巻、第 7 編、第 4 章には、「漂泊者とヒターノについて」と題され、1555～1668 の間に制定・再確認される第 1～5 条の法令が示されている。第 5 条には、「ヒターノとその妻、子供、使用人をインディアスから追放すること」（フェリペ 2 世、1581 年 2 月 11 日、エルバス）と、直接的にその名が冠せられている。

フェリペ 2 世の治世下で編纂された前者の『法令集』には、「陛下の許可なくインディアスに入り込んだすべてのポルトガル人をペルーから追い出し、この王国（スペイン）に送るよう命じる法」（1568 年 7 月 15 日、フェリペ 2 世、マドリー）が所収されており、「ペルー地方の *Ciudad de los Reyes*（リマ市）に座すアウディエンシアの王、長官、聴訴官は、その地方に、我らそしてポルトガル王国その他の地域の許可なく入り込んだ極めて多く（*mucha cantidad*）のポルトガル人およびヒターノがいる」と、アンデス地域・ペルーにおける相当数のヒターノの存在が明記されている。年代より、王室への報告は、第 5 代副王トレド就任直前の副王空位時代以前になされたと判断される。

さらに同『法令集』には、上述した『インディ

アス法令集』第 5 条が、異なる文言を伴って示されており、「副王により、ペルー地方の総督・提督そして Ciudad de los Reyes（リマ市）に座す我らのアウディエンシアの長官を任じられた Don Martin Enriquez 閣下より、我らのインディアスのいくつかの場所に、彼らの様式で用いる衣装と言葉そして乱れた住まいで、インディオたちの間を歩き回るヒターノが密かに入り込んでいると報告されている。無垢なるインディオを容易に騙し、この王国の損害の原因と捉えられているからである...（後略）」と、ペルー・アンデスの先住民とヒターノの接触・共存が問題視されている。

しかしながら、ヒターノという固有名詞を伴うその他の文書は今のところ確認できない。よって、先住民の語りや歌に目を向けてみると、極めて示唆的な歌詞が確認された。

ペルー中央高地の伝統的な祭祀（チョンギナダ）では、次のような歌詞を含む歌が女性によって歌われている。“Escúchame momento falla moriyo（ちょっと異変を聞いて、私、死んじゃったの）、Quisiera contarte lo que me pasa a mí（私に起こったことを伝えたいの）、Entre lágrimas en los ojos te diré（目に涙を溜めて、お話ししましょう）、Me enamoré de un Hindú, Chongino（インド人・「チョンギノ」を好きになったの）／Me enamoré (un) Hindito, Chonginito（インド人・「チョンギニト」を好きになったの）”。

この歌詞の中で、チョンギノあるいはスペイン語の縮小辞が付されたチョンギニトは、「インド人」とも呼ばれている。先住民言語やスペイン語では意味不明とされるこの「チョンギナダ／チョンギノ、チョンギニト」という音をスペインやポルトガルのロマ人・ヒターノの言語 Calo 語に探ると、Chomidiñi（Bofetada：平手打ち、打撃）、Chomidiño（Bofetón：強烈な平手打ち、打撃）という単語を拾うことができる。これをスペイン語化（ar 動詞化・過去分詞・縮小辞、16 世紀以前 n と ñ の差異は曖昧）すると、Chomnidinada、Chomidino、Chomidinito と捉えることが可能で、上述した意味不明の語とほぼ同質的な音となる。よって歌詞の中の「インド人」は、パンジャブに

出自をもつヒターノと捉えることが可能となる。

かつてアンデスでは、山の神々に若年者を捧げる慣習があった。考古学的資料によれば、基本的には男女一対となり、2 つの墓坑に男女が各々入り、そこで頭部を殴打されている。上記のようにスペイン語化されたロマニ語チョンギナダ・チョンギノ・チョンギニトは、「一撃を加えられた者」という意味となる。ケチュア語で同質的な意味をもつ山の名称は、少なくない〔大平 2019〕。よって上述した歌は、死者・山の神々の世界に向かった男女の記憶が歌われており、一方（男性）はヒターノだった可能性が示唆される。

先住民社会と密接に関係していたにもかかわらず、ヒターノはペルー史から消失している。その理由は、下層社会への無関心、それが故の記述の欠如、追われる身であったが故に彼ら自身が出自の隠蔽を謀っていたこと、そして近現代の学校教育の影響下にある我々研究者が、negro、mulato、zambo、zambaigo といった人種のカテゴリーを、さほどの疑念ももたずに「アフリカの黒人奴隷」と結び付けて捉えてきたこと等に求められよう。15～16 世紀のスペイン・ヨーロッパでは、ヒターノの肌の色の黒さが強調され、社会集団・言語名である Calo は、スペイン語で negro を意味する場合もある。インカの征服者の中にも、negro という愛称をもつ者がおり、そのみから「アフリカの黒人奴隷」との関連で理解・注目されてきた。しかしその一人 Extremadura 北西部出身の Juan García は、ヒターノと深く関わる大道芸的要素も伴う pregonero（お告げを広める者）であり、征服後のクスコでもその仕事に携わっている。今後、さらに検証を加える必要がある。

【主要参考文献】

Friede, Juan, 1952, Algunas observaciones sobre la realidad de la emigración española a América en la primera mitad del siglo XVI. *Revista de Indias*, No.49, pp.467-496.

大平秀一、2019、「ペルー・『ワロチリ文書』にみられる山の神々：色彩と明暗をめぐる感性・イメージ」、『アンデス・アマゾン研究』、3 号、pp.1-56、DOI: https://doi.org/10.50952/janams.3.0_1。

ボリビア・リベラルタにおける日本人移住者：史料の整理

大島正裕（立教大学ラテンアメリカ研究所）

キーワード： リベラルタ、ゴム産業、日本人移住者、日本人協会

Japanese immigrants in Riberalta, Bolivia: Analysis of historical documents

MASAHIRO OSHIMA (The Institute for Latin American Studies, Rikkyo University)

Keywords: Riberalta, Rubber Industry, Japanese Immigrants, Japanese Association

1. はじめに

ボリビア・リベラルタに集住してきた戦前の日本人については、1960年代後半から80年代には聞き取り調査など、その実態について多くの成果が見られ、1970年、移住編纂委員会による『日本人ボリヴィア移住史』が刊行され、続いて1999年には、ボリビアへの日本人集団移民100周年を記念した『日本人移住100周年誌 ボリビアに生きる』（以下、『100周年誌』）が刊行された。後者は、この時点で現存するほとんどの一次史料を活用している。但し、『100周年誌』の性格から、それら一次史料を十分に吟味、活用しているとは言い難く、これがリベラルタ（及び他のボリビア地域への移住者の）研究を進めるための次の課題となっている。

本発表では、研究を進めていく上で、今後特に重要と思われる近年見つかった「リベラルタ日本人協会議事録」の史料について確認していく。

2. リベラルタと日本人協会の歴史

ボリビアのベニ県リベラルタは、1882年までは処女林に覆われていた。しかしこの地域にあった野生のゴム林が新しい自動車産業に大いに必要であることが分かると、1880年以降、多数の民間企業がこの地に進出し、同地はゴム・ブームに沸いた。1885年7月、この地に店を構えていた商人クラウセン(Federico Bodo Claussen)は、同地が高い河岸にあることから、「Ribera Alta(高い岸边)」と名付け、その後、「リベラ・アルタ」が縮まり同地は「リベラルタ」と呼ばれるようになった。リベラルタは、ゴムの集積地として発展し、また、ゴム採取への報酬が英ポンド金貨で決

済されることもあったため、多くの労働者が一攫千金を夢見て同地にやってきた。1899年以降、ペルーに出稼ぎ労働者としてやってきていた日本人も同地の噂にひきよせられた集団のひとつだった。

リベラルタには、1911年には、約70名の日本人がいたと記録されているが、1914～15年には300名程度に増加し、1914年には日本人の中で多数派であった沖縄県人が早くも県人会を創設し、1915年にはリベラルタ日本人協会が創設されたとされる。1917～18年には500人から700人まで日本人の数は増加した。他方で、東南アジアのゴム産業の台頭で、アマゾンのゴム産業は斜陽に向かい、それに伴って日本人の職業もゴム採取業から農業、小売業などに多様化していった。

1920年代に入ると、リベラルタの日本人人口は減少に転じ、他都市や他国への流出が始まり、日本人協会は会存続のため組織の強化や地元社会との協調に力を注ぐが、やがて日本人社会内のある殺人事件を境に日本人協会は分裂し、苦難の歴史を迎えることになる。

3. リベラルタの日本人研究のための史料

ボリビアの戦前移民の研究は、新垣庸英の『日記』[大塚 1992; 小野 1970]、1910年代初頭に、農商務省からゴムの研究を委託され現地調査を行った堀内伝重の書き残した『聖母河畔の十六年』[堀内 1926]など幾つか有力な同時代史料がある。また、リベラルタには多くの日本人が集まったため、日本政府は、邦人保護のため同地の情報を収集する必要性が生じ、時に外交官を近隣

国から出張させ、このため有益な出張報告が後世に残された〔伊藤 1912; 竹中 1924; 野田 1931〕。

他方、ボリビア側の同時代史料として新聞資料も有益である。ロペスは、当時のリベラルタには非常に多くの新聞は刊行物が流通しており、文化的にも活況を呈したことを指摘している〔López 2006〕。この内、例えば日本人協会が購読していた「エル・コメルシオ (El Comercio)」紙には、1917～18 年頃の日本人に関する情報が断片的に確認できる。

さらに史料として興味深いのが 1910 年代後半に創設された日本人協会の議事録資料である。従来知られていた議事録資料は、戦後のリベラルタ市の有力者であった具志寛長が議事録原本から転写した資料である。しかし、この「具志版議事録」は、これまで十分な史料批判が行われてこなかった。

こうした中で 2020 年にラパスの移住資料館より、リベラルタ日本人協会の議事録の写しが発見された (図 1)。「具志版議事録」と内容が重複するため、議事録原本の複写 (コピー) 版の可能性が高い。同議事録は 1921 年～29 年までをカバーしており、多難な 20 年代の状況が分かる原本の複写版はリベラルタの日本人会をより正確に知るため貴重な資料となる。

本発表では、リベラルタの日本人の歴史を概観した後、主に本史料について紹介した。

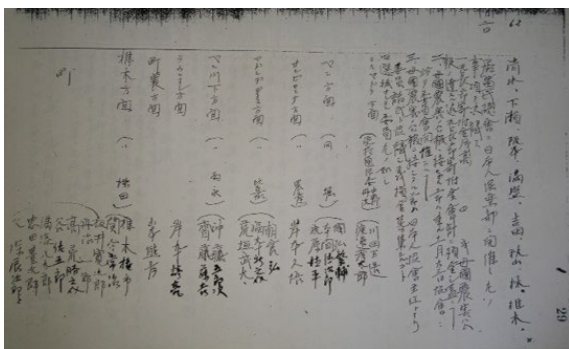


図 1 リベラルタ日本人協会議事録 (写)

【主要参考文献】

López Beltrán, Clara, 2006, Un imaginado banqueta comercial: una historia de Riberalta (Bolivia)

1890-1920. En *Estado, región y poder local en América Latina, siglo XIX-XX*, Pilar Garcia (ed.), pp.305-327, Ube/TEIAA, Barcelona.

伊藤敬一、1912、「秘露国「マドレ、デ、ディオス」河附近ニ於ケル状況一斑」、外務省通商局、『移民調査報告』、第 9 巻、pp.307-313。

大塚真琴、1992、「新垣庸英とボリヴィア逃亡移民」、『移住研究』、第 29 号、pp.89-143。

小野基雄、1970、「アンデスを越えた人々：ボリビア日本人の先駆者」、『移住研究』、第 6 号、pp.1-18。

川路賢一郎、1982、「アマゾン上流に日本人を訪ねて：ボリヴィア国ベニ州、パンド州紀行」、『移住研究』、第 19 号、pp.68-81。

具志寛長、「在リベラルタ市日本人協会の歴史」(佐藤信壽氏転写)。

竹中来、1924、「移民地事情 第六巻 暮利比重視察報告」外務省通商局 (以下に所収 外務省通商局編 1999『移民地事情 第 4 巻』富士出版)。

日本人ボリヴィア移住史編纂委員会、1970、『日本人ボリヴィア移住史』。

野田良治、1931、『南米の核心に奮闘する同胞を訪ねて』、博文館。

堀内伝重、1926、『聖母河畔の十六年』、堀内良平発行。

ボリビア日系協会連合会／ボリビア日本人移住 100 周年移住史編纂委員会、2000、『日本人移住 100 周年 ボリビアに生きる』、リベラル。日本人協会議事録 (ボリビア日本人移住史料館蔵)。

ボリビア・ラレカハの農地改革（3）

木村秀雄（自由学園・最高学部）

キーワード： アシエンダ、先住民共同体、自営農園、多様性、連結性

Reforma Agraria en Larecaja, Bolivia (3)

HIDEO KIMURA (Jiyugaken College)

Keywords: Hacienda, Comunidades Campesinas, Propiedad Particular, Diversidad, Articulación

1. これまでの2回の発表

「前々回発表」

対象地域：ラレカハ溪谷上流部（Parte Alta del Valle de Larecaja）

先スペイン期チチカカ湖岸政治集団の飛地、植民期以来現代まで先住民運動の盛んな地域、ジャガイモ栽培専業地域・トウモロコシ栽培専業地域・両作物栽培地域に区分、3種の経営体（アシエンダ・先住民共同体・自営農園）

「前回発表」

アシエンダの多様性の提示

- ・最高標高部のアシエンダ（標高 3,500 m.以上／ジャガイモ栽培専業
- ・高標高部のアシエンダ（3,000 m.以上斜面上部／ジャガイモ・トウモロコシ
- ・中標高部のアシエンダ（3,000 m.以上斜面下部／ジャガイモ・トウモロコシ
- ・低標高部のアシエンダ（3,000 m.以下中心／ほとんどトウモロコシ

今回の発表

2. 先進的（商業）アシエンダ

- ・商品作物生産地とコロノ居住地を分離
機械化・電化を推進

Espada + Romeropata (Sorata)

El Yoro + Machacamarca (Quiabaya)

Coaba (Ilabaya) Expediente なし

名前	総面積	可耕地	%	個人専有地
Espada	6.6920	6.6920	100	6.6920
Romeropata	7.5037	5.2529	70.0	5.2579
El Yoro	18.9246	9.3070	49.18	14.1435
Machacamarca	315.9119	26.4379	8.37	26.4379

コロノ	%	アセンダド	%	アイノカ
0	0	6.6920	100	0
4.7435	90.30	0.5094	9.70	0
0	0	18.3070	100	0
10.5286	39.82	15.9093	60.18	0

ロメロパタ = コロノ割当地（総数 4 人、区画数 19、区画総面積 4.7435 ha.、一人当区画数 4.75、一人当面積 1.1859 ha.、1 区画面積 0.2497 ha.）

アセンダド専有地（区画数 1、総面積 0.5094 ha.）

- ・先進的アシエンダの特徴

領域を商品生産用地とコロノ居住用地に 2 分
Espada（商品生産）
＝トラクターなどで機械化農業＋養蜂・養鶏・果樹栽培、電化

Romeropata（コロノ用）

＝Espada で働く労働者に食料を自給させるための土地

El Yoro（商品生産）

＝果樹（柑橘類 801、アボガド 379、バナナ 352）

Machacamarca（コロノ用）

＝アセンダド直轄地もあるが、中心はコロノの自給用の割当地

- ・その他の先進アシエンダの例

チラバヤ川西側最底部の Coaba（先住民共同体 Chejje の下部・平坦な好条件の土地

灌漑水路＋水力製粉機＋トラクター（機械化）農地改革原簿がないため詳細不明

Espada と Coaba はプロテスタント伝道会が購入・Chejje の先住民メンバーの一部に伝道会が土地を部分的に付与

3. 自営農園 *propiedad particular sin colono*

ほとんどは低標高地で領域全体が可耕地
高・中標高地で非耕地を持つものも少数存在
複数の土地区画を所有する例が多数
共同体の内部に存在するものもある
(アシエンダと自営農園の全体比較)

	アシエンダ	自営農園
経営体数	89	252
総面積 (ha.)	16,557.7887	1,408.2524
可耕地 (ha.)	3,957.4770	594.9976
非耕地 (ha.)	12,600.3117	813.2118
可耕地／総面積	0.2390	0.4225
経営体平均面積 (ha.)	186.0426	5.5883
経営体面積中央値 (ha.)	116.0000	1.4540
可耕地平均 (ha.)	44.4660	2.6444
非耕地平均 (ha.)	141.5765	2.9439

(アセンダド・コロノ・自営農民の個人別比較)

	アセンダド	コロノ	自営農園
人数	89	1173	252
経営体別平均人数	1	13.18	1
専有・割当地総面積	801.2576	1784.9336	594.9976
一人平均面積	9.0029	1.5217	2.3611

多くの区画を所有する自営農民

Pucarilla (Cantón Quiabaya, Com. Huayra Pacari)
総面積 7.7560 ha.、区画数 14、平均面積 0.5540
この直轄地＝コロノ割当地・領主直轄地と同様、複数の区画を分散させて所有
共同体成員の共同労働との記述

Machacamarca (Cantón Ilabaya, Com. Arapa, Sairi)
総面積 2.4632 ha.、区画数 15、平均面積 0.1642
全ての区画が直接耕作でなく小作人による
小作人は共同体の成員である可能性大
共同体成員が地主に変容したか？

外部の人物が共同体の土地を入手したか？

複数の相続人の中での分割

複数の所有区画をそれぞれ均等に分割

(例) Ajialpampa, Jachasirca

共同体でも同じやり方をするという聞き取り
実際には計測できない均等分割を証拠立て
実際の耕作者は不明

4. まとめ

標高の違いによるアシエンダの性格の違い

高標高地を持つアシエンダ＝領域面積が大きい＝コロノ割当地の比率が大きい
高標高地＝ジャガイモ耕作地＝区画面積が小さい＝トウモロコシ耕作地は大きい

溪谷内部の分布の違い

サン・クリストバル右岸＝アシエンダのみ＝
標高差を持つアシエンダ＋低地の自営農園
中央尾根両側＝共同体 1 つ＝残りは標高差の少ないアシエンダ＋自営農園
チラバヤ左岸＝大きな標高差を持つ共同体とアシエンダ（最下流の 2 つ）＋自営農園

経営体の性格は連続変異

アシエンダ（コロノあり） - アシエンダ（共同体の労働力を利用） - アシエンダ（ごく少数のコロノ） - 自営農園（領域外の小作人利用） - 自営農園（所有者の単独労働）

コロノと自営地は、面積が実質的に同等（カルカの分析結果を補う点）

- ・一つの小領域（ラレカハ溪谷）の全体像
- ・自営農園の姿
- ・コロノ一人一人の割当地の面積や分布
- ・土地の均分相続の文書による確認（不足点）
- ・先住民共同体とアシエンダとの関係不明
- ・常勤労働者とそのほかのコロノの違い不明
- ・輸送・交易・鉱山について不明（カルカも同様）
- ・アシエンダを複数所有の場合の経営戦略不明

【主要参考文献】

- 木村秀雄、2017、「農地改革期クスコ農村社会の多様性と制度」、『アンデス・アマゾン研究』、1:1-54、DOI: https://doi.org/10.50952/janams.1.0_1。
- 木村秀雄、2022、Diversidad y estructura de las sociedades rurales cusqueñas en la época de la Reforma Agraria de Velasco Alvarado, y sus condicionantes ecológicos, históricos e institucionales. En *Etnografía andina: Recorrido y valoración cultural*, Senri Ethnological Studies III, Yuriko Yagi (ed.), pp.81-123, National Museum of Ethnology, Osaka.

18 世紀半ばペルー・リマ地域の大震災と先住民による同時多発的抵抗の発生： レパルティミエントを基礎として

真鍋周三（兵庫県立大学）

キーワード： レパルティミエント、リマ商人、大震災、疫病、先住民の同時多発的抵抗

Gran terremoto de Lima-Perú y la aparición de la resistencia simultánea indígena a mediados del siglo XVIII: En el quid del problema de repartimientos mercancías

SHUZO MANABE (University of Hyogo)

Keywords: repartimientos mercancías, mercaderes de Lima, gran terremoto, epidemia, resistencia simultánea indígena

1. はじめに

17 世紀末期にレパルティミエントが始まる。1754 年になってそれは法制化される。レパルティミエントとは、コレヒドール（地方[プロビンシア]行政官）による先住民への商品の強制的分配とその代価の強制徴収である。18 世紀に深化・本格化し、先住民にとっては債務がさらに増えることになった。

18 世紀は「反乱の世紀」とよばれる。1742 年にフアン・サントス・アタワルパの反乱が中央セルバを拠点に発生する。以後、長期にわたって続く（1755 年頃まで）。リマの当局にとってそれは大きな脅威であった。

スペインは国庫拡張主義政策を継続し、植民地からの増収を求めた。1746 年から 1750 年にかけてペルー副王領の首都リマ市で大震災が発生し疫病が流行する。先住民による同時多発的抵抗が発生する。

2. レパルティミエント：リマ市とその近隣地方

レパルティミエントのためにペルー副王領内諸地方のコレヒドールに商品を提供したのはリマ商人であった。これには 2 つのポイントがある。第一に、コレヒドールはリマ商人から割り当て用商品を掛け売りしてもらって入手したことである。第二に、1678 年以降「コレヒドール」の官職は「売官制」となっており、その官職購入費をリマ商人に融通してもらって官職を購入し

たことである。コレヒドールはリマ商人の支配下に置かれた。内容面では、ラバの占める割合が大きい。17 世紀後半からラバが物資輸送面の主役となる。首都を起点とする商業網が構築された。リマ商人はリマ・コンスラード（商人ギルド）を後ろ盾に、王権とも結合し政財界に進出した。

レパルティミエントは副王領の商品需要を支え保証した。リマ商人が「卸し」を担い、地方官僚のコレヒドールが「小売り」を担った。リマ市近隣諸地方ではレパルティミエントは大規模であった。

ワロチリ地方の場合を見てみよう。この地方は早くから首都に生活必需品を供給していた。海岸部と内陸山岳部とを結ぶ交通の要衝でもあった。先住民が出稼ぎ移民として首都に流入し「セルカド」に住居を確保して、鍋職人・小商人として働いた。ワロチリ地方では先住民人口が多く集中しており、リマ市とその周辺部地方（合計 9 地方）においてその人口規模（1754 年）がハウハ、タルマに続いて 3 番目に大きかった。大半が共同体成員であり、貢納やミタ（強制労働）の負担も当然大きかった。レパルティミエントの規模は 5 か年間で「14 万ペソ」（1754 年）であり、これもタルマ、ハウハに続いて 3 番目に大きかった。

3. 1746 年リマの大震災

市壁で囲まれたリマ市は東西の最大幅が 3.7km、南北が 2.2km であった。サンティアゴ教

区、サンタ・アナ教区、サン・ラサロ教区など5教区からなった。1746年10月28日22時30分、ナスカ沖の海底を震源地として震度8.4の大地震が発生。半時間後に大津波が到来。リマとその外港カヤオに大被害をもたらした。最大津波は20mを超え、カヤオは水没した。リマ市では市壁の内側にあった一般家屋3,000軒の大半が倒壊した。副王宮も被害を受ける。リマ市の死者数は約1,300人。カヤオでは住民5,000人弱が死亡し、要塞は消失した。リマでは衛生状態が悪化し、腸チフスや天然痘などの疫病が蔓延した。市の東部では粗末な集合住宅や小屋がひしめきあい、先住民移民・職人が多く暮らしていた。鍋屋が多数存在し、鍋職人が大勢いた。しかし震災後、首都では物資の調達が滞り、人々は困苦にあえいだ。厭世観が広がる。リマを離れる先住民も続出。混沌が支配するリマ市では人々の集団的恐怖が社会運動へと繋がっていく。

4. 1750年先住民による同時多発的抵抗

(1) リマ市における反乱計画の出現

1750年6月、リマック川の北側にある郊外地区サン・ラサロ教区から反乱計画の存在が副王に伝達された。副王は、アウディエンシアのオイドール（聴訴官）を検察官に任じ、「首謀者」の割り出しと逮捕に乗り出す。6月26日、コチャルカス地区サンタ・アナ教区の鍋屋の工房で指導者が逮捕された。

7月22日、関係者6名（ミゲル・スリチャク、サンティアゴ・ワルパ・マイタ、メルチョール・デ・ロス・レイエス、アントニオ・カボ、グレゴリオ・ロレド、フリアン・アヤラ）がリマ市中央広場で絞首刑に処せられ、その後八つ裂きにされた。身体の一部は、処罰として市壁に晒された。関係者の大半が先住民であった。

インカ貴族の末裔フランシスコ・インカは副司令官であった。サンタ・アナ教区で陶工ギルドの長を務めていた。6月、反乱計画の途中でリマ市からワロチリのラワイタンボに帰還する。

反乱計画の概要は以下の通り。真夜中に反乱軍は副王宮を襲撃し、副王庁の王権閣僚全員を捕える。その後カヤオに進み、監獄を襲撃しそこ

に置かれている武器を奪う。先住民職人（レンガ積み職人、大工、鍛冶屋）やペオン（日雇い労働者）との合流を目指す。

(2) ワロチリの反乱

ワロチリではフランシスコ・インカに共鳴する先住民が内外から結集していた。例えば、カンタ、ヤウヨス、ハウハ、タルマ、ボンボン（＝パスコ）地方からワロチリに到着していた先住民だけでも400人を超えたようだ。1750年7月26日、ワロチリで反乱が始まった。コレヒドールを襲撃し捕え処刑する。

反乱統率者としてはフランシスコ・インカの他に、リマの反乱計画立案者のひとりであるペドロ・サントスがいた。ワロチリ反乱はリマにおける先住民の抵抗と同時多発的に発生した。副王マンソ・デ・ベラスコはワロチリ内外の当局者に対応を委ねた。9月頃までに反乱は鎮圧された。

5. おわりに

リマ市において先住民はレパルティミエントの本質であるリマ商人の役割やその根幹を察知していた可能性が高い。先住民は大震災と疫病に遭遇し荒廃した首都の姿を目の当たりにした。その衝撃がスペイン人支配者に対する反乱計画の策定、反乱に繋がったように思われる。

先住民は、リマ市（カヤオを含む）やその近郊ワロチリにおけるスペイン人・白人支配者の排除を目指すことで、不当な搾取・収奪、抑圧から解放されるものと考えた。1750年の先住民の同時多発的抵抗は18世紀ペルー副王領における大反乱の先駆けであったといえよう。

【主要参考文献】

- O'Phelan Godoy, Scarlett, 2002, Una rebelión abortada. Lima 1750: la conspiración de los indios olleros de Huarochirí. en *Sobre el Perú, Homenaje a José Agustín de la Puente Candamo*, Tomo II, pp.935-967, Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú, Lima.
- Walker, Charles F., 2008, *Shaky Colonialism: The 1746 Earthquake-Tsunami in Lima, Peru and Its Long Aftermath*. Duke University Press, London.

アンデス・アマゾン学会ホームページ
URL : <https://sanams.web.fc2.com>

アンデス・アマゾン学会事務局
〒905-8585 沖縄県名護市為又 1220-1
名桜大学 国際学部 長尾研究室気付
事務局連絡先 : anam.estudios@gmail.com

アンデス・アマゾン学会研究発表要旨集 13 号
Proceedings of the Annual Conference of SAAS
Volume 13

発 行 日 : 2024 年 11 月 20 日
編集・発行 : アンデス・アマゾン学会
発 行 者 : 会長 大平秀一
編集代表者 : 鳥塚あゆち